

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12056

研究課題名(和文) 乳房再建術を受ける乳がんサバイバーの主体的な「生」を支える援助プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of an assistance program to support the voluntary "life" of breast cancer survivors undergoing breast reconstruction surgery

研究代表者

二渡 玉江 (Futawatari, Tamae)

群馬大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号：00143206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：乳房再建術を受ける乳がんサバイバーの診断時から再建術終了までの体験を半構成的面接調査から明らかにした。この結果から、一連のプロセスにおける支援のポイントを抽出した。告知による衝撃やその後の生活に対する不安に寄り添うといった従来の知見に加えて、術後の創部のイメージを正確に情報提供するとともに、再建後の生活行動とも関連させて支援することの重要性が示唆された。

さらに、再建術後は創部の大きさや人工乳房への違和感・痛みに困惑し選択した意思決定を否定的に捉えることもあった。この時期の身体症状緩和と気持ちの揺れをしっかりと受け止めることが意思決定プロセスを支える重要な局面であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、乳房再建術を受ける乳がんサバイバーの診断時から再建術終了までの体験を明らかにした上で支援を検討することによって、乳がんサバイバーのニーズに沿った内容になった。また、乳房再建術は、乳がんサバイバーが社会生活を送るために重要なアピアランスケアの発展に寄与するものである。

研究成果の概要(英文)：A semi-structured interview survey revealed the experience from the time of diagnosis of breast cancer survivors undergoing breast reconstruction surgery to the end of reconstruction surgery. From this result, the points of support in a series of processes were extracted. In addition to the conventional findings such as being close to the impact of notification and anxiety about life after that, it is important to provide accurate information on the image of the postoperative wound and to support it in connection with life behavior after reconstruction. Was done.

Furthermore, after reconstruction, I was sometimes confused by the size of the wound and the discomfort and pain of the artificial breast, and I sometimes took a negative view of the decision I made. It was an important phase to support the decision-making process to alleviate the physical symptoms and to take the sway of feelings during this period.

研究分野：看護学

キーワード：乳がん がんサバイバー 乳房再建術 支援プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

乳がんの初期治療は手術療法が主体であり、患者の QOL を考慮し乳房温存術が増加しているものの、全施設を平均すると約 40% の患者が乳房全切除術を受けている。乳房は女性らしさ示す象徴の一つと考えられ、乳房切除を女性性の喪失と捉えることも少なくない。「乳房と一緒に自分自身までもなくしたようだ」といった発言は、乳房を失う悲しみだけでなく、女性としてのアイデンティティの喪失を示している。乳がん患者は 39 歳以下の若年層が 7 % 程度を占めることや長期生存が可能になったことから、乳房再建術は初期治療の選択肢の一つとして検討する必要がある。

2006 年より自家組織移植による乳房再建術に保険適用が開始されたが、技術的に難しいこと、乳房以外に傷跡が残り身体的負担も大きいこと、専門の形成外科医との連携が必要なことから、再建率は 3 % 程度にとどまってきた。しかし、2013 年、人工乳房と乳房再建用の皮膚拡張器が特定保険医療材料として承認され、乳房全切除術を行った患者に保険適用下で乳房再建術が行えるようになったことから、乳房再建実施件数は飛躍的に増加した。

乳房再建術は患者のライフスタイルや価値観、乳がん治療の状況、体型等様々な要素を加味して検討する必要がある、患者の満足度が重要となる。また、乳房再建術の方法は、手術を行うタイミングと再建が完成するまでの手術回数によって分類され、再建が完成するまでには長期間を要するものもある。

乳房喪失に伴う苦悩は、アイデンティティという側面と社会生活を送る上での他者関係性から生じる不都合という側面から検討する必要がある。乳房喪失は常に病気や治療を意識させるだけでなく、自分が魅力的でなくなり、今まで通りの関係ではいられなくなるのではないかという他者からの評価の低下に不安を生じさせ、自尊感情やアイデンティティの低下が生じる。「乳がんは手術をしておしまいでなく、その後、どう自分を取り戻すか」という課題を抱える。乳房再建は新たな人生へのリセットであり、生き方の選択という命題を突きつけられる。むしろ、切除術よりも重い決断が要る。」という患者の言葉は、乳房再建術に伴う心の葛藤を示している。従って、乳房再建によって自分らしい生き方を取り戻し、女性としての自信を回復させ、肯定的な自己概念が形成できるようセルフアドボカシーを高める支援が必要である。

しかし、乳房再建術を受ける乳がん患者の体験、再建術終了を見据えた長期的な意思決定プロセスについての研究はなく、具体的な看護支援方法の確立には至っていない。

## 2. 研究の目的

- 1) 乳がん手術後乳房再建術を行った乳がんサバイバーが、乳がん診断時から乳房再建終了時までには体験した困難と対処について質的帰納的に明らかにする。
- 2) 質的研究の結果を基に乳房再建術を受ける乳がんサバイバーの社会生活上の課題を自己概念の低下と他者関係性から生じる困難という点から明確化し、診断時から再建術終了までの時系列の中でセルフアドボカシーを獲得するために必要な支援内容を検討し、援助モデル原案を作成する。
- 3) 原案を多職種専門者会議に提案し、多角的な視点で援助モデルを精練する。さらに、援助モデルを社会生活の中で円滑に活用できるよう援助モデルを考案する。

## 3. 研究の方法

- 1) 乳房再建術を受ける乳がんサバイバーの診断時から再建術終了までの体験 (困難と対処)

の明確化

(1)目的：乳がん再建術を受ける乳がんサバイバーが、がん診断から再建術終了までにどのような体験をしているのか、また困難と対処の状況を自己概念および社会役割遂行の視点から明らかにする。

(2)対象：乳腺外科を有する総合病院で乳がんと診断され手術を受けその後乳房再建術を受ける研究協力の承諾が得られた65歳以下の女性、約15名とする。

(3)調査方法：インタビューガイドに基づく半構成的面接調査とし、内容は乳がん告知から、手術を受け、乳房再建術に至る経過における体験と困難への対処等で構成する。

(4)分析方法：修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(以下 M-GTA)を用いて、質的帰納的分析を行う。

## 2) 乳房再建術を受ける乳がんサバイバー援助モデル原案の考案

専門家会議による援助モデル原案を作成する。社会復帰し、職業を持ち、外来受診時に十分な時間の確保ができない状況を考慮し、Web 上の視聴覚教材を作成する。

## 4. 研究成果

18名のがん診断時から乳房再建終了までに体験した困難と対処のプロセスは以下のようであった。

一次二期乳房再建術を受けた乳がん患者が体験する困難と対処のプロセスは、【確実な生を求めて葛藤し再建術を希望する】ことによって、乳房全摘出術に臨み、【自分に合った再建方法を模索する】。このプロセスでは、<人工物に対する抵抗>、<胸のふくらみに重点を置く>など、自己の価値観と向き合い、再建術後の自分のイメージをしていることが特徴であった。そして乳房再建術を受けると【術後の苦痛に対処し、今後を見据える】というプロセスを辿った。

この結果、【確実な生を求めて葛藤し再建術を希望する】ことによって、乳房全摘出術に臨むプロセスでは、診断時の気持ちの揺れに寄り添うこと、適切な情報提供、全摘出術による不安への対応、全摘出術への期待の承認が必要と考えられた。乳房全摘出後の【自分に合った再建方法を模索する】では、全摘出後の個々の生活の困り事への対応に加え、乳房再建方法の選択の葛藤に寄り添うことが重要である。再建術後の【術後の苦痛に対処し、今後を見据える】では、乳房再建した体験を肯定的に受け止められるよう、術後の生活の困り事への緩和への対応を迅速に行い、一連のプロセスへの気持ちの表出を促すことが重要である。

これらの要素から、一次二期乳房再建術を受ける乳がんサバイバーに必要な支援内容を抽出し、内容をまとめた。

専門家会議で検討した支援のポイントは、再建術を選択し乳房全摘出術に臨む段階では、告知による衝撃やその後の生活に対する不安に寄り添うとともに、サバイバーが自分の状況を冷静に見極められるよう感情表出を促し気持ちの整理を図ること、治療選択に対する家族の考えを把握し、互いが納得できるよう関わることである。また、再建後の自分を具体的にイメージし、術後の実際のイメージとのギャップを軽減することも重要である。再建方法の選択にあたっては、再建直前まで悩むサバイバーおり、それぞれのメリット、デメリットを正確かつ具体的に伝えるとともに再建部分の変化だけでなく、再建後の生活行動と関連させて選択できるように、具体的な生活を想起しながらともに考えていく必要がある。

再建術後は、創部の大きさや人工乳房への違和感や痛みに困惑し、選択した意思決定を肯定的に捉えられないサバイバーもみられた。まず、これらの身体症状の緩和に取り組むこと、同時に自身で症状の出現状況やどんな状況で緩和するかなど意図的に確認することで、自分なりの工夫が見いだせるよう支援し、症状軽減成果を実感できるようにする必要がある。症状の緩和とともに重要なことは、自分の意思で選択した再建に意味が見いだせるよう支援することである。そのためには、症状が落ち着いた時点で、日常生活を振り返り、うまくいっていること、いないことを整理して、うまくいっていないことへの具体的な対処方法をともに考えることが重要である。以上の内容を反映した指導教材を作成した。今後は、乳腺看護外来の一環として乳房再建術を受ける乳がんサバイバーの支援に活用していく。

本研究では、告知による衝撃やその後の生活に対する不安に寄り添うといった従来の知見に加えて、術後の創部のイメージを正確に情報提供するとともに、再建後の生活行動とも関連させて支援することの重要性が示唆された。さらに、再建術後は創部の大きさや人工乳房への違和感・痛みに困惑し選択した意思決定を否定的に捉えることもあった。この時期の身体症状緩和と気持ちの揺れをしっかりと受け止めることが意思決定プロセスを支える重要な局面であることが判明した。乳房再建術は、乳がんサバイバーが社会生活を送るために重要なアピランスケアであるが、がん告知の衝撃体験と同時に複数の治療選択の意思決定に迫られ、さらに乳房再建術終了までの期間中、サバイバーに寄り添い、納得した意思決定ができるよう支援する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 廣河原陽子、二渡玉江、奈良衿花、一場慶、菊地沙織、塚越徳子、日下田那美、廣瀬規代美、中西陽子、堀越政孝
2. 発表標題 一次二期乳房再建術を受けた乳がん患者が体験する困難と対処のプロセス
3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 廣河原陽子、奈良衿花、堤愛梨、菊地沙織、日下田那美、一場慶、樫澤鈴子、牧口貴哉、堀口淳、二渡玉江
2. 発表標題 自家組織による一次二期乳房再建術を受けた乳がん患者が体験する困難と対処のプロセス
3. 学会等名 第4回群馬乳房オンコサージャリー研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菊地 沙織  (kikuti saori)  (10758254)	群馬大学・大学院保健学研究科・助教    (12301)	
研究分担者	中西 陽子  (nakanisi youko)  (50258886)	群馬県立県民健康科学大学・看護学部・教授    (22304)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	塚越 徳子 (tukagosi noriko) (60723757)	群馬大学・大学院保健学研究科・助教  (12301)	
研究分担者	広瀬 規代美 (hirose kiyomi) (80258889)	群馬県立県民健康科学大学・看護学部・准教授  (22304)	
研究分担者	堀越 政孝 (horikosi masataka) (80451722)	群馬パーズ大学・保健科学部・准教授  (32309)	